信毎俳壇

坊城　俊樹 選

妻並ぶ遺影の下の昼寝かな　（長野市）坂口　智弘

風鈴や母逝きし日と同じ音　（長野市）松本　博人

亡き妻がひよいと顔出す昼寝かな　（松川村）岡　豊村

泡ひとつして水中花今を生く　（長野市）武田　芳子

夏座敷座敷童のゐる気配　（安曇野市）中山　一孝

梅雨明くる鉄匂ふまで鎌を研ぐ　（長野市）松本　宏要

友偲ぶ早一年の炎暑の日　（長野市）清水美佐子

だんご虫まるまり鎧ふ油照　（佐久市）飯島八代恵

天の川アンモナイトの眠る町　（松本市）辻　俳代

夏足袋を脱いで稽古の張りほどけ　（佐久穂町）石田　弘子

佳作

海原や艦橋掠め白き蝶　（大町市）原田　勝

卓袱台と猫と女の昼寝かな　（小海町）井上　英一

選評

一句目、おそらく鵜(うの)屋の下辺りで昼寝をされたのだろう。そこには亡くなった奥様(おくさま)の写真が。寂しいがまだ愛情を込めて見守ってくれている。二句目、風鈴の音色というのは確かに日によって違う。今日は母上が亡くなった日と同じ音に聞こえた。郷愁の音色か。三句目、偶然だがこの句もまた亡き妻の句。しかもこの方も昼寝の最中なのだ。夫というものはいつまでも亡き妻の夢を見る。

今井　聖 選

自転車を花かごとして夏野かな　（上田市）滝沢むつみ

地下足袋にすいと抜かるる登山かな　（安曇野市）平　至行

夏休孫等雑魚寝の十六畳　（佐久市）中島　信子

まず呼吸舟田背骨夏木立　（長野市）武田　芳子

青田波早くもバイヤー畔に立ち　（佐久市）栗林　貞夫

徒然に鯰に化けて沼の底　（松本市）伊藤　和夫

青蔦や防犯灯を搦め捕り　（飯田市）原　哲夫

反り返る出前メニューや大西日　（長野市）荻原　宏祐

マネキンの見立ての水着当てみる　（佐久市）町田ゆかり

病妻(つま)太り介護の吾は夏痩す　（松本市）小林　幸平

佳作

試し堀りの芋の小さしまだ早し　（佐久市）依田　俊

灼け砂を浴びし釜の凹(へこ)みかな　（長野市）長田　光弘

選評

一句目、広い夏野の点景として自転車がありその自転車の籠には花が満載されている。自転車自体が夏野の花籠なのだ。二句目、比較的低い山でも素人は完全装備。その横を登り慣れた地下足袋の人が抜いてゆく。視点の面白さ。三句目、こんな広い座敷に孫たちが雑魚寝している風景はいろいろな意味で幸福感に満ちている。四句目、自分も夏木立の中の一本の木になったような呼吸法である。

神野　紗希 選

最後とも知らず水着のまま別る　（松本市）久我　綺乃

夏薊天空へ雲立ち上る　（飯田市）大石　昭重

「えー意外」って棒読みのサンドレス　（中野市）風間　陽介

波を追ふ波のうねりや晩夏光　（長野市）荻原　宏祐

青胡桃ノアの箱舟は通か　（長野市）武田　芳子

貸す金は無いが西瓜を持ってゆけ　（長野市）白鳥　寛山

日焼の子十指しなやかトス上げる　（長野市）松本　宏要

仙人掌を咲かせて夫婦老いにけり　（飯綱町）坂井　寿男

すかーとにふたつのぽっけすももつみ　（中野市）風間　一乃

フードコート若きに混ざりアイスティー　（佐久市）岩下サク江

佳作

なみなみと紅茶の旨しダリア咲く　（千曲市）倉石みつる

辞書捲り風頬撫でて夏柳　（上松町）前野　春樹

選評

一句目、今生の別れと分かっていれば、もっと丁寧にさよならしたのに、またねと明るく手を振って、それが最後。生命感あふれる水着に別離の悲しみを重ねた対比が、滑稽で切ない。二句目、薊(あざみ)咲く夏野から天へ、力強く雲は湧く。清々(すがすが)しい大地の賛歌。三句目、適当に相槌(あいづち)を打つサンドレスの彼女。人間観察が効いた句はやはり面白い。四句目、波の描写が、刻々と過ぎゆく時間を可視化する。